

2024年度

愛知の美術教育

(第52集)

目次

I	はじめに	2
II	研究の方向性について	3
III	第74次教育研究愛知県集会について	4
1	全体を通して	4
2	討論の内容	4
(1)	子どもの思いや考えを豊かにする題材の工夫	4
(2)	コミュニケーション活動を通して発想や表現を広げる実践	4
(3)	総括討論	4
3	今後に残された課題	5
IV	授業実践	5

対話による発想をもとに、主体的に表現する児童の育成
～特別支援学級図画工作科「ワタしと『たぬきの糸車』」の実践を通して～

春日井市立西山小学校 松浦 百香

愛知教職員組合連合会 教育課程研究委員会美術教育部会

2024年度 教育課程研究委員

ブロック推薦

◎部長 ○副部長

名古屋			尾張			三河		
名前	単組	分会	名前	単組	分会	名前	単組	分会
清水 翔一	名古屋	桜山中	長谷川 恵輔	一宮	千秋小	内藤 季美	豊橋	岩田小
石谷 和佳子	名古屋	森孝中	原田 崇平	春日井	中部中	浅井 優子	岡崎	葵中

第71次～第73次教育研究全国集会レポート提出者

71次			72次			73次		
名前	単組	分会	名前	単組	分会	名前	単組	分会
◎大島 聖矢	名古屋	明正小	○大道 士子	豊田	衣丘小	○松浦 百香	春日井	西山小

第74次 教育研究全国集会 レポート提出者 今井 優樹 (岡崎・緑丘小学校)

I はじめに

学習指導要領では、表現及び鑑賞の幅広い活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色、美術や美術文化と豊かにかかわる資質・能力を育成することを、図画工作科及び美術科の目標としている。そのために、以下の(1)「知識及び技能」、(2)「思考力、判断力、表現力等」、(3)「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力について、学年ごとの系統性を意識して育成することをめざす。

【各学年の目標】

	小学校			中学校	
	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年	第1学年	第2学年及び第3学年
(1) 「知識及び技能」	対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して 気付く とともに、 手や体全体の感覚などを働かせ 材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。	対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して わかる とともに、 手や体全体を十分に働かせ 材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。	対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して 理解する とともに、材料や用具を 活用し 、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。	対象や事象を捉える造形的な視点について 理解する とともに、 意図に応じて 表現方法を工夫して表すことができるようにする。	対象や事象を捉える造形的な視点について 理解する とともに、意図に応じて 自分の表現方法を追求し、創造的に 表すことができるようにする。
(2) 「思考力、判断力、表現力等」	造形的な 面白さや楽しさ 、表したいこと、表し方などについて考え、 楽しく 発想や構想をしたり、 身の回りの作品 などから自分の見方や感じ方を 広げたり することができるようにする。	造形的な よさや面白さ 、表したいこと、表し方などについて考え、 豊かに 発想や構想をしたり、 身近にある作品 などから自分の見方や感じ方を広げたりすることができるようにする。	造形的な よさや美しさ 、表したいこと、表し方などについて考え、 創造的に 発想や構想をしたり、 親しみのある作品 などから自分の見方や感じ方を 深めたり することができるようにする。	自然の造形や美術作品 などの造形的なよさや美しさ、 表現の意図と工夫、機能性と美しさとの調和、美術の働き などについて考え、 主題を生み出し豊かに 発想し構想を練ったり、 美術や美術文化 に対する見方や感じ方を広げたりすることができるようにする。	自然の造形や美術作品などの造形的なよさや美しさ、表現の意図と 創造的な工夫、機能性と洗練された美しさ との調和、美術の働きなどについて 独創的・総合的に 考え、主題を生み出し豊かに発想し構想を練ったり、美術や美術文化に対する見方や感じ方を 深めたり することができるようにする。
(3) 「学びに向かう力、人間性等」	楽しく 表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などにかかわり 楽しい 生活を創造しようとする態度を養う。	すすんで 表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などにかかわり 楽しく豊かな 生活を創造しようとする態度を養う。	主体的に 表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などにかかわり 楽しく豊かな 生活を創造しようとする態度を養う。	楽しく 美術の活動に取り組み創造活動の喜びを味わい、 美術を愛好する心情を 培い、 心豊かな 生活を創造していく態度を養う。	主体的に 美術の活動に取り組み創造活動の喜びを味わい、美術を愛好する心情を 深め 、 心豊かな 生活を創造していく態度を養う。

II 研究の方向性について

子どもたちは、科学技術の飛躍的な進歩や環境問題の深刻化、少子高齢化、感染症の流行や戦争の勃発など、予測困難で変化が激しい時代を生きていく。そんな子どもたちにとって、自身や他者の人生や社会をよりよいものにしていくために必要であり、且つ美術教育だからこそ培うことができる力は何か。それは、図画工作科及び美術科の目標にも示されている通り、子どもたちが生涯にわたって、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わっていくことができるようにするための「造形的な見方・考え方」であり、「よさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力である感性や、想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値をつくり出す」力である。

人は、「美しい」「うれしい」「楽しい」「あたたかい」「美味しい」「幸せ」「便利」などのポジティブな感情や、「悲しい」「苦しい」「寒い」「苛立たしい」「寂しい」などのネガティブな感情を日々抱きながら生きている。美術教育を通して子どもたちが、日常生活の中でポジティブな感情をより豊かに感じ取ることができるようになったり、形や色を使って、ネガティブな感情をポジティブな感情に少しでも変換することができるようになったりしてほしいと願う。また、言葉を使わなくても、絵や彫刻、デザインや工芸で気持ちや考えを表すことができるようになったり、他者の気持ちや考えにふれ、共感したり視野を広げたりすることができるようになったりしてほしいと願う。人として欠くことのできない感性や想像力、創造力を培うことができるのが美術教育である。

そのため、教育課程研究美術部会では、「ゆたかな学び」を以下のように考え、「子どもの思いや考えを豊かにする題材の工夫」と、「コミュニケーション活動を通して発想や表現を広げる実践」を柱として、教育研究活動をすすめていく。

【美術教育での「ゆたかな学び」】

- ・ 表現や鑑賞を通して造形的な視点を理解するとともに、表したいことや主題に応じて材料や用具を活用したり、表現方法を追求したりして、創造的に表す。
- ・ 生活や社会、友達の活動や作品、美術作品の中から、造形的なよさや美しさ、表現の意図、創造的な工夫、機能性などを感じ取って見方や感じ方を深めたり、表したいことや主題、表現方法を考え、創造的に発想や構想をしたりする。
- ・ 主体的に活動に取り組み、創造活動の喜びを味わったり、形や色、美術を愛する心を深めたりして、楽しく豊かな生活を創造していく態度を養う。

Ⅲ 第74次教育研究愛知県集会について

1 全体を通して

「子どもの思いや考えを豊かにする題材の工夫」と、「コミュニケーション活動を通して発想や表現を広げる実践」の二つのテーマに沿った実践報告と質疑応答の後、「美術教育を通して子どもたちに伝えたいこと～子どもたちのゆたかな学びのために～」をテーマに、総括討論が展開された。ともに、子どもの姿や思い、教員の願いなどをもとにしてたいへん活発な質疑応答や討論が行われた。

2 討論の内容

(1) 子どもの思いや考えを豊かにする題材の工夫

子どもがふるさとに愛着をもち、主体的に色や形を工夫することができるようにするために、校区の製茶工場に協力を仰いでお茶を試飲し、地域の魅力とあわせてパッケージをデザインする実践や、子どもが自分を見つめ、「楽しさ」を実感しながら表現することができるようにするために、箱を舞台にして想像を広げ、材料や表現方法を考えて自由な世界をつくる実践などが報告された。

7本の実践報告をもとに、題材の導入で鑑賞する作品や資料の選び方や、テーマや表し方の決め方、地域とのかかわり方などについて活発な質疑応答が展開された。

(2) コミュニケーション活動を通して発想や表現を広げる実践

子どもが「やってみたい」という思いをもって、新しい形や色をつくり出す喜びを味わうことができるようにするために、育てた野菜やさまざまな材料を使ってスタンプ遊びを楽しみ、ファッションショーで友だちや保護者と見合う実践や、子どもが自ら生きて働く知識を習得することができるようにするために、SDGsのかるたやすごろくから想像を広げ、何を、どこで、誰と、どのように表すのかを自分で決めながら絵に表す実践などが報告された。

8本の実践報告をもとに、交流でのICT機器の活用方法や、自由進度学習における個に応じた支援の方法、学年をまたいだ鑑賞のあり方など、活発な質疑応答が展開された。

(3) 総括討論

総括討論では、近くの発表者どうしや全体での話し合いを通して、周りの目や評価を気にしたり、リアリティを追究したりすることで、発想を広げられなかったり表現活動への苦手意識を抱いてしまったりする子どもが少なくないことが確認された。そのため美術教育では、「やりたい」という意欲や「すごい」と感じる感性、自分でやる経験や、考えて答えを見つける課題解決能力、発見したり表現したりしたときの感動などを大切にすべきであることが確認された。最後に、「図工美術は取り組みが大切」「自分の『楽しい』や『好き』を見つけよう」など、子どもや教員自身の目標になるようなキャッチフレーズを考えて意見交換した。

助言者からは、ライフスタイルに合わせた「提案力の時」と呼ばれる現在、「感性」と「論理」が必要であり、だからこそ「STEAM 教育」のように美術の力が求められている。対象や事象を「観る」活動と、表現を「客観視」する活動を大切にしたいという助言を得た。また、自由な発想や豊かな感性、こだわりをもって個性を探究する力が求められている中で、仮に中間鑑賞や交流が画一化へ向かっている場合には注意が必要である。人生をたくましく、しなやかに生きるために、「アートを楽しむ」実践を重ねてほしいという助言を得た。

3 今後に残された課題

- (1) 生活や社会の中の美術と豊かにかかわり、表現方法を創意工夫したり、見方や感じ方を深めたりする題材の工夫
- (2) 他者とのかかわりの中で個性を探究し、美術を愛好する心情や豊かな感性を培う学習展開の工夫

IV 授業実践

1 研究主題

対話による発想をもとに、主体的に表現する児童の育成

～特別支援学級図画工作科「ワタしと『たぬきの糸車』」の実践を通して～

春日井市立西山小学校 松浦 百香

2 主題設定の理由

特別支援学級の児童が、自己の力を発揮し、自分らしく、主体的に生きる姿勢を身につけることは、将来、自身が望む生活をつくるための基盤になると考える。主体的とは、まず「自分は何をしたいのか。」「自分はどのようにしたいのか。」という意欲をもち、それを実践するための方法を考え、実践した自分を振り返ることだと考える。

本学級の児童は、図画工作科の授業を楽しみにしている一方で、見通しがもてない活動に不安を感じたり、自分らしさのある表現をすることに自信をもてなかったりして、表現を諦める児童もいる。このような状況は普段の生活場面でも見られ、困ったことがあるが何をどう伝えたらよいかわからないという言語による表現力の乏しさが散見される。それが、図画工作科における発想に影響を与え、「何をどのようにみるか。」「何をどのようにかくか。」「何をどのようにつくるか。」という自分の考えを形成することの困難さにつながっていると考えた。

3 本実践でめざす「ゆたかな学び」について

授業実践において、まずは児童が活動を純粋に楽しめるような「ゆたかな学び」をめざしたい。児童らが育てている植物を用いて、教科横断的で楽しい活動を行い、意欲をもつことができるようにする。次に、対話を通して、楽しい活動から「何をどのようにみるか」「何をどのようにかくか」を言語で切り取る。その中から選択したり連想したりすることで、「何をどのように表現するか」を発想することができると思

えた。最後に、発想したことを伝え合う場面を設定し、互いに認め合い、自分らしさのある表現に自信をもてるようになれば、「ゆたかな学び」の中で主体的に表現する児童の姿が見られると考え、本主題を設定した。

4 研究仮説（実践の見通し）

【仮説 1】 自分たちで育てた植物を用いて、教科横断的で楽しい活動を設定すれば、見通しがもてない活動に不安を感じたり、自分らしさのある表現をすることに自信をもてなかつたりする児童も、意欲的に取り組むことができるだろう。

【仮説 2】 楽しい活動から「何をどのようにみるか」「何をどのようにかくか」を、対話を通して言語で切り取れば、その中から選択したり連想したりして、「何をどのように表現するか」を発想することができるだろう。

【仮説 3】 発想したことを伝え合い、認め合う場面を設け、自分らしさのある表現に自信をもてるようになれば、主体的に表現することができるだろう。

5 仮説に対する具体的な手だて

	授業実践「ワタしと『たぬきの糸車』」
仮説 1 の手だて	① 国語科で、「たぬきの糸車」の物語を読む。 ② 生活単元学習で自分たちが育てた綿を、昔の道具の糸車を使って糸紡ぎ体験をする。
仮説 2 の手だて	① 「たぬきの糸車」で、何をかくか、学級全体の対話を板書し、明確にする。 ② たぬきが何をしているところをかくか、板書を見ながら教員との対話を通して明確にする。 ③ たぬきがそれをしているとき、どんな気持ちなのか、そしてその色はどんな色か教員との対話を通して明確にする。
仮説 3 の手だて	① 発想したことを発表し合い、互いのよいところを認め合う場面を設定する。

6 研究の実際と考察

(1) 授業実践

本学級の児童らは5月から謎の植物の種をまき、成長とともに、色画用紙で子葉や花をつくり、謎の植物の声が聞こえる王冠をつくってきた。130日かけて育て、謎の植物の正体が「綿」であったと理解したタイミングで、国語科「たぬきの糸車」の物語を読んだ。「糸車で糸をつくれるんだね。」「たぬきさんうれしそうだったね。」という感想とともに、「障子ってなあに。」という疑問も出てきた。すると児童Dが「こういうのだよ。」と、習字の半紙と段ボールを使って、障子を作ってみせた。手作りの障



【資料 1】 児童 D が作った障子

子で、物語の中でたぬきが影を映したり穴を開け

て覗いたりするように、パペットを使って楽しんだ【(前頁)資料1】。「たぬきの糸車」の物語を理解し、糸車で糸を紡ぐことができると思った翌日、出前授業を行った。昔の道具の糸車で、綿を糸に紡ぐ体験をした。児童らは、真剣に話を聞き、綿くりや綿打ち、糸紡ぎをして、意欲的に活動していた。

このようにして、自分たちが育てた綿を糸にする体験をもとに、対話を通して、「たぬきの糸車」の物語の雰囲気を表す感想画をかこうと考えた【資料2】。

1 単元 ワタしと「たぬきの糸車」

2 目標

- (1) 糸車の実物を見て、捉えた部分ごとに定規やコンパスを用いてかき、糸車全体をかき表すことができる。
- (2) 話し合ったことをもとに、物語の雰囲気を表す色合いやその表し方を工夫することができる。
- (3) 「たぬきの糸車」について話し合ったりかいたりすることを通して、つくりだす喜びを味わおうとしている。

3 指導計画 (7時間完了)

第1時 「たぬきの糸車」で、何をかくか、学級全体で対話し、板書で整理する。

第2時 実物をみながら、糸車をかく。

第3時 板書を見ながら、たぬきが何をしているところをどのようにかくか、教師との対話を通して明確にして下書きする。

第4～6時 物語の雰囲気を色で表すとどんな色か対話を通して明確にして描く。

第7時 発表し合い、友達のよいところを認め合う。

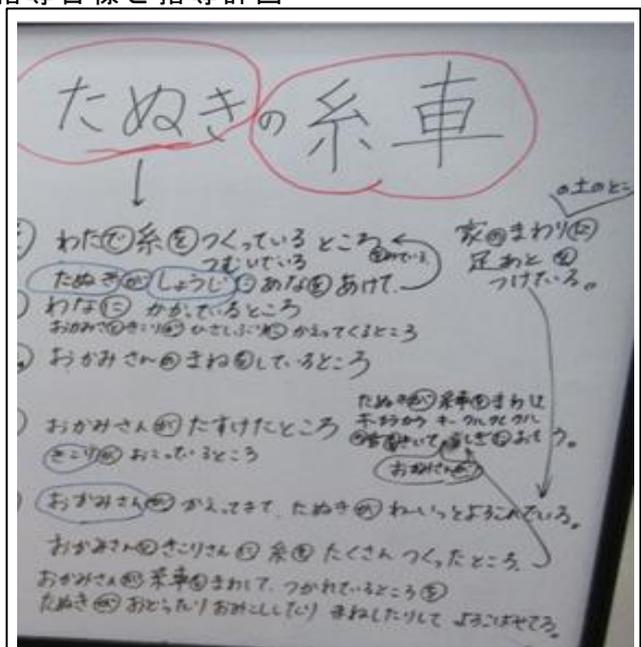
【資料2】実践②の指導目標と指導計画

ア 第1時の実践記録

「たぬきの糸車」で、何をかくか、学級全体で対話し、板書で整理することにした。

まず、「たぬきの糸車」と板書し、感想画をかくことを伝えた。

次に、「たぬきってどんなことしていたかな？」と聞くと、「綿で糸を作っていた。」「たぬきが障子に穴を開けて、それをみていた。」「たぬきはわなにかかった。」「おかみさんがわなにかかったたぬきを助けた。」など、つぎつぎと印象



【資料3】第1時の板書

に残った場面について、児童らが対話していた。

対話を板書した後、T「たぬきの他に、かきたいものはあるかな？」と聞くと、「糸車」「おかみさん」「障子」「きこり」などが出てきたので、それらを丸で囲んだ。対話することで、友だちの考えや板書に書かれた自分の考えをもとに、かき表したいことをつぎつぎと思い付いている様子が伺えた【(前頁)資料3】。

イ 第2時の実践記録

まず、実物を見ながら糸車のかくことを伝えた【写真1】。

T「糸車って、どんな形があるかな？」と聞くと、丸、四角、長方形などと答えた。どの形が気になるかを聞くと、全員が丸と答えた。では、丸からかいていこうかと伝えたところ、児童Fが「あれが使えるんじゃない？」と言出し、児童Dが「コンパスが使えるってことね。」と言った。



【写真1】実物の糸車

全員で、コンパスを用いて円をかいた。その後、棒や支える台のかき表し方は、「定規使ってもいいですか。」と児童らから案が出た。円からかきはじめ、それにつながる部分を付け加えていくことで、糸車全体をかき表した。糸車をかき表すための方法を児童らが対話を通して思い付き、実践することができた。

次に、クーピーで色を塗ることにした。「何色を使って塗る？」と個別に対話したところ、児童Bは、「茶色と黄色と肌色をまぜたらいいと思う。」と言って色塗りをした。児童Dは、「古い道具だから茶色だけがいいと思う。明るい色は新しい道具みたいだから。」と話し、木の模様を茶色の濃淡で描き表した。児童Fは、「いろいろな色を混ぜると本物みたいになる。」という自分の知識を実践し、古い木の色を茶色や黄土色だけでなく、緑や黄緑、水色も用いて表現した【写真2】。児童Cは、児童Dの話したことや色塗りの様子を見て、「私も緑色を入れてみる。」と言って行動に移していた。児童らは、描画材を指定されても、対話をする中で自分の表したい方法、つまり、「どのようにかくか」を考え、自分らしさのある表現をすることができた。



【写真2】児童Fの糸車

ウ 第3時の実践記録

感想画は、T「自分が思ったり感じたりすることをかくから、この場面の様子だけかくって決めなくていいよ。」と全体に伝えた後、第1時の板書のコピーを配った。「みんなまで話したね。」「いっぱいあるね。」と板書のコピーを読みながら、児童らが振り返っていた。T「この中から、自分の表したいことを見付けようか。見付けたら、丸で囲ん

でみてね。」と話した。児童一人ひとりと対話をする、かき表したいことが言葉で明確になっていった【資料4】。発想したことを鉛筆で下がきしていった。

児童B	綿で糸を作っているところと障子に穴を開けて見ているところと畏にかかったところをかきたい。
児童C	綿で糸を作っているところと障子に穴を開けて見ているところと畏にかかっておかみさんが助けているところをかきたい。
児童D	綿で糸を作っているところと障子をかきたい。
児童E	綿で糸を作っているところ、たぬきがおかみさんの真似をしているところをかきたい。
児童F	おかみさんが帰ってきて、たぬきがわーいと喜んで、足あとをつけているところをかきたい。

【資料4】児童らの発想「何をかくか」

エ 第4～6時の実践記録

たぬきを塗る際、自分たちが育てた綿でスタンプをして塗ることを伝えた。たぬきの色を塗りながら、「たぬきは、どんな気持ちで糸を作っているかな。」と教員と話した。さらに、その気持ちを色で表すとどんな色か、背景に塗る色を教員との対話を通して決めた【資料5】。

児童B	優しい気持ちだから緑にする。のぞいているときはワクワクしているから、赤と白を混ぜる。
児童C	糸を作るとき優しい気持ちだから、ピンクにしたい。春が近いから、黄緑色。畏にかかったときは、怖いから青色にする。
児童D	楽しい気持ちで糸を作っているから、赤にする。
児童E	糸を作れて、うれしい気持ちだから、水色にする。
児童F	春が来たみたいに、黄緑にする。足あとは、花びらみたいに、ピンク色にする。

【資料5】児童らの発想「どのようにかくか」

児童らは、それぞれに自分の発想をもとに、表現をしていた。表現の途中で、試行錯誤する様子も見られた。

児童Dは、最初に障子を作ってみせたように、絵にも障子を貼りたいと言った。半紙に割りばしでスタンプして、障子を表現した。それを見て、他の児童も真似していた。児童Bは、真似したところ、障子が濡れて破れたので、穴を開けてたぬきが覗く様子をかいた。

また、児童Dは背景に自分の好きな赤色を塗ろうとしたが、「ちょっと違うかな。」と言って考えた後、「赤にうすだいたいや白を混ぜようかな。」と言った。どうしてかと聞くと、「赤って激しい感じ。うすだいたいとか白をまぜたら、感じが変わる。」と言った。

あたたかい雰囲気を出すため、どのように混色するか、児童Fに相談していた。児童Fは、「赤はもうちょっと少ないほうがいいよ。白が多めがいいと思うな。」と答えていた。

児童Bは、「糸車の糸を表すのに、綿を貼ってもいい？」と発想した。その様子を見た児童Cも、「私もそうしたいな。」と言って、同じように綿を貼り付けた【写真3】。

児童Eは、糸紡ぎ体験をした自分のうれしい気持ちとたぬきの気持ちを重ねていたようだったが、児童BとCが綿を貼り付けている様子を見て、「自分も綿を貼りたい。」と言った。綿を手に持ち、絵の上に置いてみると発想が変化したようで、「綿を散らばらせて貼って、雪みたいにする。」と言った。材料を手にすることで、新たな発想が生まれ、雪の中で一匹、糸を紡ぐたぬきの様子を表現することができた【資料6】。



【写真3】綿を貼り付ける児童の様子

オ 第7時の実践記録

絵を互いに見せ合い、対話を通して友だちのよいところを認め合う時間を設けた。「綿の使い方がいろいろあっていいね。」「この色、いい感じだね。」と、互いのがんばりを認め合い、友だちの表現のよいところを見つけることができた。友だちに認められた児童らはうれしそうな表情を見せていた。



A



B



C



D



E



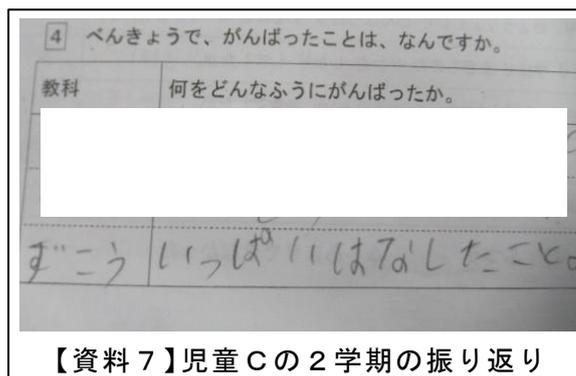
F

【資料6】児童らの感想画

7 児童の変容

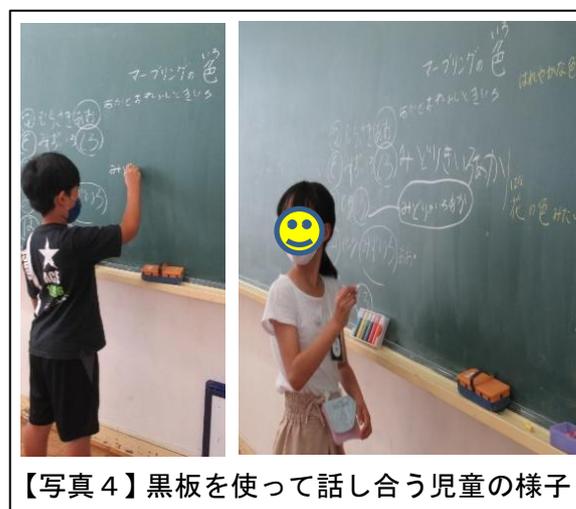
児童らは、対話を通して「何を表現するか」「どのように表現するか」という発想を楽しむようになった。

児童Cは、交流学級での2学期の振り返りで、がんばった勉強を「ずこう」と書き、何をどんな風にならしたのかについて、「いっぱいはなしたこと」と振り返っていた【資料7】。



また、図画工作科で他の単元をした際、マーブリングの色を決めるときには、児童Fが黒板の前に出て、「みんな、何色にする？」と聞いた。みんなそれぞれ、赤色と答えたり、自分で青色と板書したりした。友だちが何色にするかをみて、自分は違う色を使ってみようかな、この色の組み合わせにしようかなと話し合うことができた【写真4】。

対話によって、何をどのように表現するかを発想できることを実感し、自分らしさを大事にしなが、主体的に表現しようとした結果だと考える。



8 仮説の検証

(1) 仮説1について

教科横断的で楽しい活動からはじめることで、図画工作科において「何をどのようにかくか」を決めることの難しさを取り払うことができた。また、自分たちで育てた植物を用いることで、自分自身の経験と重ね合わせやすくなり、活動が児童らにとって身近なものとなった。見通しがもちやすく、自分なりの考えをもって、意欲的に取り組む様子が見られたので、仮説1は有効であった。

(2) 仮説2について

楽しい活動から「何をどのようにみるか」「何をどのようにかくか」を教員や友だちとの対話を通して言語で切り取り、それを板書することで明確にすることができた。その中から選択したり連想したりして、「何をどのように表現するか」を発想することができていたので、仮説2は有効であった。

(3) 仮説3について

発想したことを伝え合い、認め合う場面を設けることで、友だちのよいところや自分のよいところに気付くことができた。自分が工夫したりがんばったりしたところを友だちに認めてもらうことで、自分らしさのある表現に自信をもてるようになった。児童らは、授業でも授業外でも、自分らしさを大事にして、表現する方法を考えたり、

自分を振り返ったりして主体的に表現しているので、仮説3は有効であった。

9 研究の成果と課題

本研究から、対話により発想が生まれ、その発想を他者に認められ、自分自身でも認めることで、主体的に表現する児童が育成されることを確かめることができた。

課題としては、活動中に児童が発想したとき、そのよさをわかりやすい言語で切り取り、学級全体に波及させることの難しさが挙げられる。児童が発想したことについて、何に着眼し、どのようにしようと考えたのかを全体に還元することができるよう、研鑽を積みたい。